

がん社会 を診る

中川 恵一

武田信玄も徳川家康も胃がんが原因で死亡したと考えられています。運は家康に味方したようです。

健康ブームの日本ですが、家康は、元祖「健康オタク」でした。伝来したばかりのたばこは、当時、頭痛などに効くクスリとしても人気がありました。でも家康は決してたばこを吸おうとしないばかりか、禁煙令を出したくらいです。直感的にたばこの害に気付いていたのかもしれない。漢方薬については、医者顔負けの知識を持ち、自らが使った調剤道具一式が東照宮に残されています。

今川義元の人質だった家康は、義元が美食と運動不足で肥満になり、馬にも乗れない姿を見て育ちました。反面教師として、粗食と運動を心がけたといわれます。たしかに、運動を心がけ、若い頃の体形を維持すれば、確実にがんの

天下は「粗食と運動」の家康に

リスクを減らせます。家康は、大坂夏の陣で豊臣秀頼と淀君を自害に追い込み、天下統一を成し遂げた翌年の1616年に亡くなりました。

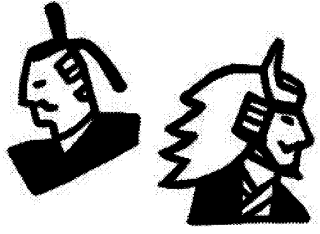
1月21日、たか狩りの後、たいの天ぷらを食べた家康は、翌朝から激しい腹痛と嘔吐(おと)に襲われました。天ぷらは、当時京で流行しており、側近が天下人の食欲が無いのを案じてすすめたものです。腹痛や嘔吐は胃がんの進行が原因だったのでしょうか。家康の症状は、胃がんが大きくなって通過障害が出たためと思われる。

その前から徐々にやせてきていたこと、侍医の触診で腹部にしこりがあったことなどから、胃がんの可能性が高いと考えられています。1600年の関ヶ原の戦いの頃には、家康のがんは胃の粘膜を侵し始めていたはず。

私たちの体内には、毎日、多数のがん細胞が発生していますが、免疫細胞が水際で殺しています。しかし、免疫細胞が殺し損ねたたった一つのがん細胞が増殖を繰り返して大きくなるため、症状を出すまでには20年もの年月がかかるのです。

天は、胃がんを抱えながらも天下を統一するだけの時間を家康に与えました。一方、三方原の戦いで家康を圧倒した信玄は、天下を目前にして胃がんで亡くなりました。信玄の胃がんの進行がもう少し遅ければ、日本の歴史は大きく変わっていたはず。

(東京大学病院准教授)



イラスト・中村 久美